

「半年越しの 約束を」

2011/01/16

を開けた。

額に何か触れた気がしたのだ。

たぶん、俺は眠っていてそれで目が覚めた。

けれども見えるものなんか何にもなくて、部屋中ただ暗くてそれで夜だってわかっただけだ。

不意に、どうしようもなく心細くなって呼吸の熱さを意識した。

苦しかった。喉が痛いわけでも鼻がつまっているわけでもない。頭痛もなく、ただ熱がある。

それだけなのにどうしようもなく苦しくてつらくてたまらなくて息が詰まった。

そして何か、言いようのない気持ちの悪さが喉の手前までせりあがる。

何かがおかしいと思うのに、それがなんだかわからない。説明もできなければ吐き出すことだってできない種類の気持ちの悪さだ。

ぎゅ、とつむった目尻に涙が浮くのは、感情的なものか、それとも生理的なものか。

熱に浮かされてわけもわからず、ただ眠ろうと努力した。

ぐるぐる、ぐるぐる、頭ん中に直接手を突っ込まれて、かき回されているような感覚にただ耐えた。

何とか寝返りをうったときに、こつりと、指先にぶつかる

ものがあった。

薬にもすがりたい気分だったんだと思う。

あつい。

頭の中が、体中が、ものすごく。

……熱い。

わかったことといえば今が夜だったことくらいで、熱に浮かされた頭ではそれ以上の物事をうまくまとめられなかった。

べつたりと汗で服が張り付く感覚が気持ち悪くて、でも体は砂でも詰まっているかのように重く鈍く、動けなかった。

ぐつたりと投げ出した腕さえ、指先さえ動かさそうとするだけで億劫だ。

こんな季節に風邪なんて、と思いつながら何とかうつすら目

俺はそれが何かもわからずに引き寄せ握りこみ、体を丸めてひたすら眠った。

ぐるぐるぐるぐる、かき回されていたのは記憶なのかもしれない。

俺は、いろんな夢を見た。

黒い服の男。年齢はまちまち。くるりくるりと印象が変わるから、彼が自分より年上ということしかわからない。

俺より小さかった。僕より大きかった。

大体ガキくさいことばかりだからイラついた。大体子供っぽい表情で笑うから安心した。

たまに見せる大人びた表情には緊張して、怖くて、悔しくて、悲しい。

疲れ切った老人のように見えるから悲しくて何も言えなくなる。

何もかも諦めてしまったようにそれでも安らかに笑うから、その表情は一番胸の柔らかい場所に刺さるのだ。

だから好きだった。

だから嫌いだった。

だから約束をした。

他愛もない下りなくも切実な願い。

「覚えていて、くれますか」

男はゆつくり、口を開いて。

「誤魔化すなよ……………!!」

違う、これは俺の声。

「僕に……………会いに、来てくれたんでしょう……………?」

違う、これは、誰の言葉?

「そんなつまらない嘘を吐いてくれるなよ………お願い、だから」

馬鹿にしてもいいし笑ってもいい。ただし、嘘は吐いてくれるなよ。

黒い服を着ていなくたって、いつでも印象は黒だった。

へらへらと軽薄に笑っているくせに、時々はっとするほど悲しい顔をしている。

たぶん、だから放っておけなかった。

俺は、そんな顔をさせたくて。こんな話をしたかったんじゃない。

遠い親戚の男なんか、仲良くなったっていいけれどなる必要だっけなかったのに。

「君は優しいから」

目を開けば白く明るい天井で、俺はいったん、夢に見たほどんごを思い出せなくなる。

わかったようなことを言う、たかだか年に数回遊ぶだけの関係なのに、お前に何がわかるんだと。当然抱く反発もたいていすぐに消えてしまうのだ。

「ほんっと、ずーっと、変わらないね」

………こいつは何の話をしてるんだ？

「話があるんだ」

「……………んんーっ」

体を起こしてまずしたことといえば、背伸びだった。腰もひねってみればばきばきと心地のいい音がして、ついでにくあ、と大あくび。

昼過ぎまでひたすら寝こけていた。代わりに頭も体も軽かった。

昨日の夜なんかあんなに死にそうな気分だったのにな。夏風邪なんてこんなもんか、と俺はベッドを降りた。

「あれ？」

かたん、と何かが床に転がって、拾ってみたらそれは棒付きの飴玉なのだった。

こんなもの買った覚えはない。

それでもなんとなく、昨日の夜、枕元にあったことを思い出せた。

くるくると指で回しながら考えてみても出所に心当たりがない。

「おつかしいなあ」

それでもなぜか、見覚えがあるような気がしていた。

ふ、と本棚に目をやったのは偶然か、必然か。

本の手前にペン立てがあつて、そこに筆記具に混じつて似

たような飴が刺してあつた。

あれなら覚えてる。

あれも同じようにいつの間にかばんに入っていて、何となく、捨てられず食べることもできずに取つてあつたものだった。

うん？ とまた、一人で小さく首をひねる。

ぱつと一瞬、頭をよぎるものがあつたのにもう思い出せない。

夢を、そうだ何か夢を、見ていたような気がする。

思い出そうとするととたんに頭がだるくなつて、軽く振る。どうやらまだ本調子ではないらしい。

今日も一日、部屋でおとなしくしていようと思つて持つた飴もいっしょにペン立てに入れようとしたら、何かが突っかかつてできなかった。

ペン立てを取つてのぞいてみれば、何か小さく折りたたまれたものが押し込まれていた。

「えっ？」

足元にペン立てが転がって派手な音を立てる。

ばらばらといくつかこぼれてしまった音もしていたのに、反応できなかったのは広げたそれが映画の半券だったからだ。でも知らない。この映画を俺は知らない。

観たことない映画だ。ちょうど一年前くらいにやつた、

去年の正月映画。

観たいと思っていたような気はする。少なくとも気にはな
っていた。アニメで、高校生が主人公で、青春っぽいやつ。

観たことないはずだった。
それなのにぱつと、一瞬で頭の中に話が浮かぶ。

知らない、こんな話は知らない。
そのはずなのに。

「う……………」

なんだか足元がぐらぐらした。

頭がだるい。何も考えたくない、思い出したくない。いや
それは違う。俺はきつと思いたい。それなのに何か、つ
いたてでもあるみたいに思い出すことに抵抗を感じる。無理
やりに何かをせき止められているような。俺はそれをきつと
壊したい。その抵抗を振り切りつて思い出したい。

吐き出せない違和感が胸の中で膨らんで、喉元までせりあ
がる。

圧迫されていつの間にか、呼吸が苦しい。

頭がだるい。

ぐらぐらする。

気絶したがっている自分を自覚して、奥歯を噛んで目眩に
耐えた。

それでもここで、考えることを止めちゃいけない気がして
いた。

それじゃ何も思い出せない。

何かをつかめそうで、抗い方もわからないまま胸を押さえ
た。

心臓がうるさい。ど、ど、と嫌な感じで鼓動が早まってい
る。

閃くように浮かんできた思い出は、今朝、夢に見たものだとい
感で悟った。

その途中で何度も、声を、聞いた。

「あ……………」

知っているはずの知らない誰か。

全部、全部。

そして今度こそ俺は思い出す。
閃く場面は全部夢で繰り返し返す。

もらった飴玉はまだ食べてない。

二つとも、大事に飾つてあったりするのだからいい加減自分も女々しいと思う。

けれどしょうがない。

大事なものに、嘘は吐きたくない。

そして半年後の今日に、俺は街中をひとり歩き回っている。

来るなんて。

あの人の真意を知らない。

どういうつもりで僕に会いに来てたのか、その上で記憶を消していたのか、何もわからない。

朝まで待っても来なかったということは、もう、僕には会いに来るつもりはないのだろうか。

冗談じゃない。

思い出してしまえばもう会えないなんて、どんなおとぎ話だよと腹が立つ。

あの人は見られたらいなくなる鶴でも妖精でもないはずだ。

そんな悲劇はいらぬ。思い出してそこでおしまいだなんて、到底受け入れられそうにない。

それならこつちにも考えが、ある。

あまり実行したくはないが、会えないなら、会いにこないというなら仕方がない。

でもその前にもう少し、いろいろ歩いてみようと思った。

もしかしたら会えるかもしれない。

もしかしたら会えないかもしれない。

どっちでもいい。どちらにしても、絶対にあの人を見つけるから。

だから行くのは全部、あの人といっしょに行った場所。

俺と親戚の知り合いの思い出をたどりに。

あの人と僕の思い出をなぞって。

昨日の夜から朝までずっと起きていた。
あいつ最低だ。結局姿を見せなかった。

なんて薄情なやつなんだと俺は内心楽しくなる。

そういえばそういう人だった。

いつだって自分勝手にわがままで、こつちの気持ちをわかってくれない。そのくせ律儀に半年ずつ、休みの日にだけ

駅。映画館。牛丼屋。ファミレス。マック。ショッピングモール。大学。公園。

動物園や海や遊園地も行ったことがあるけど、今日は遠いところはあきらめて思いつくままにだらだら歩く。

そして最後の場所は決めている。

その場所までを、一人で歩く。

その最後の場所というのは、駅から家の途中にある廃ビルの屋上だった。

ここから見たらきつときれいだからと、無理やり不法侵入させられた場所だ。

同じように、夕暮れの街を見下ろしていた。

もうじき日が沈みきって、そしたら空のかわりに地上が輝きだす。

それがきれいだからとずっと付き合わされた場所だった。

今日も、あの時と同じような夕暮れの空。

オレンジ色に眩しい夕日に目を細め、俺は迷いなく柵に足をかけた。

柵の分、視点が高くなってより街を遠くまで見渡せる。そんな気分になる。

柵の上は当然不安定で、ふらりふらり、体が揺れた。

案外バランスがとりづらいもので、腕を大きく広げてゆらゆら揺れる。

ぐらりと体が傾ぎそうになるたびにひやりとする。それが奇妙に愉快でたまらない。

見下ろす地上は遠くて思わず口元がすりあがる。

酔っ払ってでもいるように、大口開けて、笑い出したい気分だった。

「一日ずっと探したのに、どこにもいないし、見つからないし」

ぱくりと大きく口開けて、空気を吸ったら気持ちよかった。

吐き出す勢いに任せてわざとらしく独り言を言う。

どうせこんなところに、わざわざ来る酔狂なやつはいないはずだ。

「あーあ、しょうがない、死ぬしかないかー」

それは自分でも笑ってしまいうくらい、あんまりにも適当な声だった。

「まだまだ若いし前途有望、これから先もきつと、楽しいこと、色々あったのかもしれないけれど」

笑っている自覚があった。

こんなにも暢気で陽気な、自殺志願者もいないだろうに。

「あなたに会えないならもう、死んでも、いいや」

笑えている自信が、あった。

もう何もかも面倒になって、ふっと、力を抜く。

バランスをあきらめて、自分をあきらめて、目をつぶって、捨てる覚悟で。

前に一步、足を運んだ。

空気は踏めない。空は飛べない。

鬼でもない、死んでもいない。

ただの死にたがり宇宙に投げ出されて。

「——つに、やってんの!! この……………つ！」

がくんと、肩が外れるかと思うほどの衝撃がまず先だった。それから抜けそうなほど強く手首をつかんでいる手のひらと。

柵越しに、必死な顔をしているあんたと。

「は、ははは、ははは」

引きつった音が喉から飛び出した。

気がついたら笑っていた。

細腕一本でつながっている。足の裏に地面なんかなくて、空気も踏めなくて宙吊りで。

正直言って肩も腕も痛くてしようがないし、今さらどっと、冷や汗が背中を伝って顔も引きつってる自信があるけど。

「ばっ……………」

「ばっ」

「バツカじゃないのっ!？」

その手を掴んでいるのが柵につかまって、必死な様子であるあんただから。

なんだか笑えてしようがない、

「あんたが! 遅いんだよ! ばあーか!」

「バカにバカってゆわれた! 心外! 心底心外!」

ああ、やつはすっごい怒ってる。

顔が真っ赤だ。

少しくらい照れてくれたらいいのに。

「うん、……………ごめん」

謝ったらとたんに泣きそうな顔して。

あんたは、怒ってそれでも僕を助けてくれた。

実感というものは遅れてやってくるもので、屋上のコンクリートの上に引き上げられて、その硬さを靴の裏に確かめてしまえばもうだめだった。

柵にもたれたままずりずりと、ひざが笑って腰が抜ける。立っついたらなくなつてへたり込んだ。

本当に格好悪いと思うけどどうしようもない。

「君ね、何軽率なことしてんの！　いーい、君もうわかつてると思うけどそもそも地獄つて言うのは」

あんたが、ここにいます。僕の前で腰に手を当てる、延々と有難くも耳に痛いお説教をしてください。

死者に生者に説教を。

よりよく生きて生まれるための導きを。

なんだ、こうしていればちゃんと閻魔大王じゃないかと、笑えて、むしろ泣けてしまった。

「そうしてりやちやんと、閻魔サマっぽいのにな」

からかうように言つてやるのが精一杯で、誤魔化すように目をこすつた。

その言い方が気に障つたのか、ぴたりとあんたは口を閉ざしてしまふ。

ちよいちよい、と手招きをしたら素直に近寄つてくれた。

その両手を捕まえた。夏だつて言いうのにひんやりと白い手だった。

少し引くと、望み通り正面に座つてくれた。

それが無性にうれしくなつて、がしがしと乱暴に頭をなでた。

「いた、いたい、痛いよちよつと、何すんの！」

なんだか言葉が出てこない。

言いたいことなんか山ほどあつたはずだった。

昨日の夜からずつと、会つたら、また会えたら、言いたいことばかり考えていた。

もつと前からずつと考えていた。

それこそ半年前、あんたを思い出してから今までずつとずつと。

そのはずなのに、いざあんたを前にするとぜんぜん言葉にならない。

だから嫌がつて手をどかそうとするあんたに笑つて、座り込んだまま肩を抱き寄せた。

手のひらで背中をたどる。骨が浮いていてその形を確かめるように、手のひらを当てた。

とたんに体をこわばらせるのがなんだか微笑ましくて、肩にあごをのせて呟いた。

「ずつと、こうしたかつたんです」

背中に回した腕に力をこめた。

「あんたのこと、僕は忘れてしまっていたけど、でも、それでも」

ずっと、こうしていたかった。

抱きしめてみたらわかる。

自分でもわからないうちに穴が開いていて、痛くはなくてただ空しい。

その穴がふさがれていくように満たされていくようで、ため息が出た。

首筋に鼻をすりつけて吸い込むと、たちまち泣いてしまっそう。

……………知ってる。

それなら良かったって、笑いたかったのに瞬きの拍子に涙がこぼれた。

一度出たら止まらなくなつて、したしたと、後から後から流れていく。

それはあんたの首筋まで伝って行って、くすぐりたいだろうに、あんたはおずおずと僕を抱きしめ返してくれた。

「私もね」

首の後ろに腕がかかる。

そのまま引き寄せられるように力がこもる。

「ずっと、こうしたかったんだ」

僕の肩にも重みが乗って、したしたと、何かが濡らして流れていく。

悲しくはない。もう、つらくもない。

それでもただただ目の前の人を確かめるように閉じ込めるように抱きしめた。

本当はいけないことなんだよって、拗ねたように唇を尖らしてあんたが言った。

部屋に帰る途中だった。あたりはもう暗くなっていて、人がいないのをいいことに手をつないでいた。

「閻魔王が生者に干渉するなんて！ バレたら私大目玉だよ」

「知ってましたか。仕事って、サボっても怒られるんですよ」

「今日は休みだもん！」

ふらふらとつないだ手を揺らして歩いた。

なんだかそれだけのことが、何よりも大事なことで心臓がとくとりと早くなった。

そんな僕とは対照的にあんたはどこか沈んだ様子だ。あのねえ、と間延びした口調と裏腹に、ひどく深刻そうに話している。

「鬼男君は、鬼男君だけど鬼男君じゃないんだよ。正確には、同じ魂の形だけど違う人なの」

そんなことを、とんでもなく重大なことのようにつてくる。

いや実際に、とんでもなく重大なことなのだと思う。

でもあんたの説明する色々は、あんたの言うところの人間

である僕には理解しがたいことばかりだ。

大事なことは違うんじゃないかって。

人間で、もしかしたら愚かで浅はかで、あんたのことなんか何にもわかかってやれないかもしれない。

でもどうしようもなく、あんたにここにおいてほしい僕は、ふーんと、わざと今までの話を軽んじるような声を返す。

思ったとおり、あんたはへそを曲げたように怒った顔をすく。

その反応を確認してから、言った。

だったら。

「僕が生まれ変わったって言うんだったら、今度は、俺に恋させて」

あんたが目を丸くした。

覚えてる。あんたがずっと昔に言ったこと。

それをそのまま返してやる。

「今度は俺に、あんたが、素敵な恋をさせてください」

足音を少し響かせながら、暗いのをいいことに手をつないで歩いていく。

部屋に帰る途中の道だ。

ここは人通りも少なく、とても静か。

しばらく無言で歩いていく。

こっそりとなりを伺ってみたら、真っ直ぐ前を向いたまま、あなたが真っ赤になっていた。

等間隔に街灯が立っている。

その明かりの下で唐突に、あなたが手をほどいて正面に立つた。

腰に手を当てて、怒ったように目を吊り上げてでも、顔が赤いから大して怖くなかった。

「だめ！ だめだめ反則！ なにそれ、何それ！！」

怒った声で、怒った顔で、でも耳まで赤くして、びしっと人差し指を突き立ててあなたはこういうのだ。

「いい？ ちゃんと今度も、君が私に恋させること！」

怒った声で、怒った顔で。

でも、目が泣きそうだった。

また泣いてくれたらいいのにつて思った。

そしたらもっと自惚れられる。

でもやっぱ、泣くより笑ってほしいから。

「……………お安い御用です」

手をとって、引き寄せた。

何かの予感でぎゅうっと目をつむるその表情も確認してから、額にそっと唇を落とす。

「ねえ、じゃあ、次はいつ会えますか？」

そのためにまず、次の約束がほしかった。

次のデートの約束を。

夏のあの日にあなたにもう一度恋をしてから、もう半年待ったのだ。

おでこをおさえてばくばくと、何も言えないあなたからまた半年後なんて言われたら落ち込んでしまいそうだ。

そう思う反面、それでもいいとさえ思える自分もいる。
待てる。いつまでもずっと。

それこそいつか死んでしまっても。

また、絶対に合えるって信じられるから。

だからまたデートをしよう。

もう一度二人で、恋がしたい。

生意気、と呟く声に笑って、キスをした。